

佳作

スズメの親子愛

大阪府八尾市立高美中学校一年 玉木 隼

僕が小学三年生の頃の話だ。毎週土曜日、日曜日は祖父と一緒に近くにある小さな川へ釣りに行ってた。その川には小さな小魚やザリガニなどが多く生息している。

いつものように釣糸を川の水面へほうりこんでザリガニが掛かるのを待つ。すると上の方から水に浮かんだ小さな物体が流れてくるのが見えた。そのとき僕は「どうせ、また誰かが捨てたゴミだろう」と無視していた。そして、その物体が近くまで流れてくると、それは、水に溺れて衰弱しきったスズメだと分かった。祖父は竿でそのスズメを手繰り寄せ手ですくい上げた。そのスズメはまだ小さなひなだった。僕は近くに咲いていたあじさいの花を一輪とって、その上にスズメを寝かせた。

そして、三十分くらい経ったとき、ジェイボード

に乗って僕の後ろを通り抜けようとした少年が声を上げた。それにびっくりした僕は後ろを振り向くと、そこには、さっきすくい上げたスズメが二足でしっかりと立っている姿があった。このまま放っておくと自転車などに轢かれかねないので、一度家で面倒を見ることにした。

家へ帰る途中、上空を見ると二羽のスズメが飛んで付いてきていた。

家に着き、スズメが暑さをしのげる場所を探す。すると家の前の空き家に正方形型の小さな穴があった。とりあえず、その穴にスズメを置き家の中でエサになりそうなものを探した。しかし、見当たらなかった。だったので米粒を十粒ほど手にとりスズメがいる穴に置いておいた。

少し経って様子を見に行くと、五、六粒、米粒が無くなっていった。人さし指を何となくスズメに近づけると、そのスズメは鳴きながら人さし指に噛みついた。その目は少し麗しいようにも見えた。元気がなくなった証拠だった。そして、家の二階に横長のダンボールがあったので、スズメを移動させた。というのも、そのままおいておくと猫に襲われる可能性があるからだ。

そして、また少し時間をあけて見に行くと、そこに姿は無かった。よく見回しながら探すと、近くの木の木陰に姿があった。急いでその場所に向かい近づくと、そのスズメは逃げなかった。少しは僕に心を開いてくれたのだろう。そしてまた、二階のベランダに連れて上がる。まだ羽は乾いていなかった。

そして、日が暮れ始めた頃。二階に上がり様子を見に行くとその姿はまたも無かった。すると上からスズメの鳴き声が聞こえた。上空を見ると、スズメが鳴きながら飛んでいた。そのスズメの中には、さっきまで羽が湿って飛べなかったスズメの姿があった。周りのスズメ達は二羽でそれは、川から家へ持って帰って来るときに付いてきたスズメだった。そのスズメ達は川で拾ったスズメより一回り大きかったので親だろう。親達は子スズメが飛べるようになるまで待っていたのだ。